



2024年11月  
第755号

日本基督教団 平塚教会  
発行人 平塚教会  
編集人 中山洋司  
〒254-0045 平塚市見附町6-18  
電話 〇四六三(32)八八三一



# 納得と共感

平塚教会牧師 北川一明

いつも塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。

(コロサイ四・6)

復活したキリストは弟子たちに近づいて来て「行って全ての民をわたしの弟子にしなさい」とおっしゃいました(マタイ二八・18〜20)。「大宣教命令」と言われます。この御言葉を受けてキリスト教会は伝道します。

キリスト教信仰を知らない人は勢力を拡張するために伝道していると考えるのが普通でしょうか。教祖の言葉だから妄信的に従うと考える人もいるかもしれませんが。中には「信者は伝道しないと天国に行けないと思っている」と考えていえる人もいますでしょう。

教勢拡大のために宣教するものではありません。しか

少し挑発的な言い方をするならば、伝道・宣教しないと「天国に行きにくくなる」または「天国に行ってもそこが天国と理解できない」ということはあるかもしれませんが。キリストの命令に従わないと罰せられるということではありません。伝道・宣教することで信仰が理解できるようになります。

その際、難しいもつともらしいことを言っても、自分で理解していなければ宣教になりませんし、自身の信仰理解も進みません。理解できた範囲で言葉にしてみると、恵みを恵みとして改めて受け取り直すことができます。

幼稚園では一〇月五日に崇善小学校の体育館をお借りして運動会を行いました。話がとぶようですが、伝えることで自分が整えられて行く例を運動会のことでお知らせします。

平塚二葉幼稚園の現場では、運動会が自立教育のため一つの大きなツールになっています。当日に至るまでの相当期間「子どもたちが子どもたちで運動会をする」よう努めています。

具体的には、年長児童に運動会をやるか／やらない

## 目次

納得と共感	牧師 北川一明 …1	教会ニュース	…4
		訃報	…4
平塚教会グリーンフ・ケアの会始まる	…3	編集後祈	…4

かを問いかけることから始まります。「やらない」と言われても困りますが、そこは「やりたい」と言わせるように仕向けます。その上でどんな種目をやるか、道具であれ担当であれ、やるに当たって必要なことは何かを子どもたちに話し合わせます。最終的には年長児童が年中、年少の子どもたちと協力させながら運動会を作り上げます。

子ども主体にすると、毎年学年の個性で出来栄は大きく変わります。

昨二〇二三年の年長組はたいへんまとまりのあるクラスでした。そのために運動会は「やりたい」となっても、誰とやるかをたずねると最初は「扱いにくい年中を除いてやる」という話になりました。たしかに昨年の年中、つまり今年の年長組は比較的「個」が強いのでまとめるのが大変です。保育者が「やっぱりみんなでやろう」となるように誘導しました。その結果、昨年とは運動会がスムーズに進行していました。その点では昨年の方が今年よりも見栄えは良かったように感じました。

もっとも、それは運動会として「今年よりも去年が良かった」ということではありません。見栄えを良くすることが目的では

ありません。「今年の方が、運動会運営に年中を巻き込めた」という逆の評価もあるかもしれません。今年は初めはまとまりが緩かったために、運動会をする中で「友だちと協力することの大切さに気付いた」ということであれば、教育効果としては十分です。

園の考える目的がどの程度実現できたかを自己検証する際には「子どもたち自身がいきいきと活躍できたか」が一つの指標になります。多くの改善の可能性はあるにしても昨年も今年も園の考える目的からすれば良い運動会だったと思っています。

そうは言っても、こうした考え方が保護者のみなさんに伝わっていないと「なんだか散漫だった」「運営がスムーズでない」などと批判が出かねません。それではやろうとしていることもやりにくくなります。ステークホルダー（意思決定に影響を与える利害関係者）の納得と共感がなければ理想の実現は難しくなります。

納得と共感を得るために現実には多少の妥協が必要になる場合もあります。それでも妥協する前に出来ることは、考え方を知らせることです。園では保育者たちが懇

談会などでの場でお伝えするように努めています。知らせようとした時、若い先生がたも自分のやっている自立教育が何であるか、何を目指しているかが改めて分かってきます。私もこの文章を書いたお陰で運動会が分かった面があります。

人に分かってもらうことは簡単ではありません。聖書を書いた人たちも「話すことがたくさんあるのですが、あなたがたの耳が鈍くなっているのです、容易に説明できません（ヘブライ五・11）」とか「できることなら、わたしは今あなたがたのもとに居合わせ、語調を変えて話したい。あなたがたのことで途方に暮れているからです（ガラテヤ四・20）」と、苦勞しています。ですが聖書は苦勞しながら言葉を探すとてできあがりしました。

伝道・宣教を「できない」「つまらない」と感じるならば、きつと「正しいこと」を言わなければならないと考えて自分の「自己」とは少し離れた話になっているのです。信仰が自分にとって何であるかを話すことで、信仰というものが分かってきます。

## 平塚教会グリーンフ・ケアの会始まる

9月22日に「グリーンフ・ケア入門講座（講師：佐藤章子先生）」29日に第一回目の「（仮称）ふたばカフェー」を行い、平塚教会でのグリーンフ・ケアがスタートしました。

入門講座で佐藤章子先生は、グリーンフ・ケアについて

『「グリーンフ・ケアのグリーンフ」という言葉は、愛した人をなくした心の悲しみ、寂しさ、孤独感、喪失感、どうしようもない寂寥感にさいなまれた空虚な心を表した言葉です。心は虚しさでいっぱいでしょうもない状態が続きますと、心は暗黒の底にいるような恐ろしさに襲われて、ただただ此処から居なくなりたい！ 亡くなった人の墓へ行きたい！ の気持ちで終始苦しみ続けます。私も同じ経験をしました。』

そんな時、家族の会（注：日野原記念ピースハウス病院家族の会）で同じような経験をしてお仲間が心の中を聞いてくださり、お話をするうちに「自分は一人ではない、しっかり生きないとだめ」の気持ちに変化していきました。これが私が体験した

『「グリーンフ・ケア」だと理解しています。』と概説されています。



そして家族の会に出席された先生は、『その当時はケアされているとは感じませんでした。が、経過をたどりますと皆様にケアを受け段々と自身を取り戻し、その後、悲しみの中で生活されている方々と傾聴の中でその方の心を受け止め、お話を共有させて頂き、共に歩いていくうちに、その方も少しずつ通常のご自分に戻って、お元気が出た様子は何度もお見掛けしてきました。』

同じ悲しみを乗り越えて「お仲間同士」

に出会ったことの有難さ、心強さは、「悲しいのは私だけではない。地に足をしっかりとつけて生きなければ」の思いに達します。愛する人が病気や事故その他いろいろな原因で急逝され、突然取り残された人はそのこと自体を受け止められません。ですから、悲しみを体験されてきた皆様、グリーンフ・ケアによって心身ともに回復されていく。これは、大事な事で絶対必要なことと思います。

．．．．．中略．．．．．

20年以上の年月、そんな風にたくさんの方とお話をさせていただき、今思っていることがあります。それは「人は人からしか癒されない」ということです。

話を聴く、受け止める、共感する、そしてその話に関心を持つ、この繰り返しで双方が理解しあい、悩んでいる方の心が少し軽くなる気がします。』

と、体験を語って下さいました。

そして29日、家族の会に当たる平塚教会版ふたばカフェーが開かれました。

ふたばカフェーのコーディネーター阿閑牧子姉より、手記を頂きましたので紹介します。

『9月22日、佐藤章子さんの講演会で、

「グリーン・ケア」の意味を、皆様に分かりやすくお話しされたと思います。

9月29日午後1時、「(仮称)ふたばカフェ」を開始しました。私を含めて5人の参加でした。語り合う「グループケア」として、とても良い人数だったと思います。一時間、それぞれ自身の体験を話しました。コロナ禍の中で入院された家族に面会できない寂しさ、辛さ、又弱っていく方をただ見守るだけの日々の苦しみ悲しみなどを語り合いました。

参加された方から「悲しみは忘れることはありません。このような場所ができてよかった。心がいくらか軽くなりました。又参加したい。」と言われました。

人と交わり語り合うことは大切なことです。次回参加される方をお待ちしております。(阿閉牧子)

## 教会ニュース

### ◎チャイルド・ファンド・ジャパン放映

教会では、2月23日(予定)にチャイルド・ファンド・ジャパンの方をお招きして説明会を予定しています。その前に皆様に少しでも関心を持っていただくとうと、PR映像をお借りしてコーヒータイト時に放

映しています。支援を受けた子ども達からの手紙と写真も展示しており、教会員有志による30年間の一端が伺えます。

### ◎韓国研修旅行

10月12日～14日の3日間、中学生1名・高校生2名が引率者(2名)とともに、韓国研修旅行をしました。3名とも初めての海外で、学校に通う合間にバスポートの取得や旅行の準備とあわただしかったことでしょう。

研修内容は、韓国サランへ教会での礼拝体験と皆様との交流、韓国文化体験等です。きっとこれからの人生につながるよき体験をされた事と思います。その様子は次号「おとずれ」に掲載予定です。

なお、この韓国研修旅行は、教会員の献金によって実現しました。

### ◎子どもがつくる運動会

参観していたAさんは、「幼稚園で子どもが司会・進行をする運動会は初めて見ました。そして、競技中に一人一人の子どもの名前を呼びながらアドリブで放送しているなんて、よほど日頃保育の中で子ども同士が交流をしていないとできませんよね。すばらしい!」とつぶやいていました。

10月5日、崇善小学校体育館で運動会が行われました。

プログラムに書かれている

● ただいまこうじちゅう こうじにきをつけて(年長ゆり)

● かしてもらえませんか(年中きく)

● ちびっこたんけんたい(年少つばみ)  
の種目は、子ども達でやり方やルールの配置を考え、小道具の制作もしました。子どもがつくる運動会を目指して2年目。年長の子ども達は、其々が係を分担し一生懸命に仕事をしている姿がとても印象的でした。

### 訃報

中村義姉(106歳)逝去

10月8日天に召され、11日北川一明牧師の司式により、湘和会堂金目にて家族葬が行われました。姉は誕生日と同時に受洗平塚教会での信仰生活は50年を超えられました。主の平安を!

### 〔編集後祈〕

ノーベル平和賞が日本被団協へ。記念して国民の祝日に、いや国連が絶対に戦争をしない日の設置をと夢見ています。

(編集子)